

全体会② ひな壇トーク！ 「みんな役割がある地域づくり」 ～役割分担とコラボレーションの裏話公開～

ひな壇の皆さん

【後列・左から】

阿部 圭宏：NPO法人市民がささえる市民活動ネットワーク滋賀代表
谷口 健一：ねあがりカライダスコープ代表、
能美市協働型まちづくり市民会議副委員長
定免久美子：羽咋市市民活動支援センター事務局長、
NPO法人わくわくネットはくい理事
谷内 博史：石川地域づくり協会コーディネーター、
七尾市地域づくり協働推進室まちづくりコーディネーター
畦地 履正：株式会社四万十ドラマ代表取締役

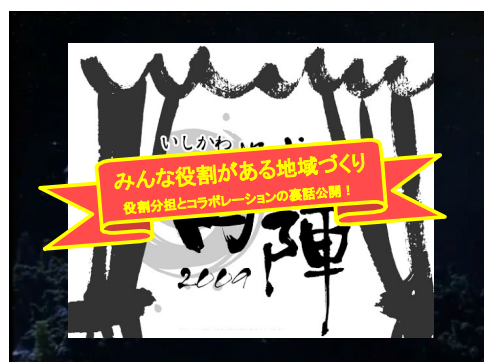


【中列・左から】

高野 誠鮮：羽咋市役所 1.5 次産業振興室総括主幹
福原 義明：和倉温泉「多田屋」副支配人
北林 昌之：一本杉町町会長、一本杉通り語り部処「お茶の北島屋」店主
水野 雅男：石川地域づくり協会コーディネーター、
金沢大学地域マネジメントコース教授
はせがわ祐希：「ドリーム工房☆はせがわ」デザインプロデューサー、
「スターリマン・コミュニティ・プロジェクト」代表

【前列・左から】

木下 齊：LLP市街地経営研究機構代表、
中小機構中心市街地／商業活性化アドバイザー等多数
濱 博一：石川地域づくり協会コーディネーター
南出 洋子：ミニデイサービス菜の花のおうち代表、
介護福祉士、認知症ケア専門士
田中策次郎：福祉ボランティアグループ「チーム20」会長
常光 利恵：NPO法人志ネット・石川理事長、介護福祉士、
社会福祉士、認知症ケア専門士



【アシスタント】

森山 奈美：
石川地域づくり協会コーディネーター



【進行役】

赤須 治郎：
石川地域づくり協会コーディネーター、
コピーライター

【司会進行】これより「ひな壇トーク」を始めます。テーマは「みんな役割がある地域づくり～役割分担とコラボレーションの裏話公開～」です。五つの分科会のゲストとコーディネーターの皆さんが、地域づくりの「今だから話せる話」「泣ける話」「ああ、勘違い」など、とっておきの裏話を披露します。進行役は赤須治郎さん、アシスタントは森山奈美さんです。

【赤須治郎】石川地域づくり協会コーディネーターの赤須治郎と申します。これからはTVのバラエティ番組『恋のから騒ぎ』を真似た進行をします。表向きの話よりは裏話をしようと思っています。私たちが「いしかわ地域づくり協会」を始めた頃、情報誌を作ることになりました。その編集会議で「いい話ばかり載っている情報誌はもう要らない」、むしろ「失敗した事例を知りたい」という話が出ました。その結果、失敗は載せられないが、失敗をみんなで聞きに行けば良い、ということになりました。当事者に会い、失敗した話を聞くことが、一番ためになるという編集方針の下、交流を兼ねた情報誌づくりをしました。編集委員の皆さんと一緒にあちこちで聞いた裏話というのが役に立ちました。今日もあまり表に出てこない話を聞きながら、皆様の地域づくりの参考にさせていただこうと思います。



本日はパネリストが15人もいますので、お話を短くまとめるために工夫をしました。パネリストの皆さんにあらかじめ質問をお渡しし、答

えをいただいています。その1行の答えがスクリーンに映される仕掛けになっています。質問は四つ用意しました。では、最初のお題からスタートしましょう。

【質問1】 活動しているときに誰かに言われて、 「泣けた」ひとこと

【赤須治郎】「泣けた」にもいろいろあるでしょうね。では、最初のお答えを。

回答1 「いつもどこにいはるんですか？」



【阿部圭宏】阿部です。いきなり私の答えが来るとは思いませんでしたが。私はNPO市民ネットというNPOをやりながら、東近江NPOセンター、滋賀県協働コーディネーター、滋賀大学の特認准教授、大津の町家を考える会事務局、いろいろやっているのです。いつも「どこに行ったら会えるんや?」「どこにいはるんや?」と言われるというのが一つ。それと、自分がやっているNPOの拠点がありそうでなくて、浮浪者のようにうろうろしている。それで、言われると、早くちゃんとした事務所が欲しいと、そういう意味も込めています。

【赤須治郎】濱さんも同じようにいわれたことはありますか?

【濱 博一】いつもどこかにいるふりをして携帯電話で全部受けています。最近、メールなどがあるのでどこにいてもネットがつながれば何とかなるのですが、「いつも家にいない」と嫁さんには怒られますね。

【赤須治郎】そうだ、いきなり脱線します。「どこにいるのかよく分からない」と怒られているのは畦地さんでしたよね。

【畦地履正】四万十ドラマの畦地です。こんにちは。「どこにいるんですか？」とよく従業員にも言われ、それから地元の方たちからも言われます。僕はまじめに営業しているのですが、どんな成果があるのかなかなか皆さんに見えにくいというのがあります。そこは分かりやすく、売り先で僕らは勝負しようということで、販売先から例えばカタログに載った時に、ここはいつ載ったのかと、「高島屋のカタログに載ったんや？」とか、そういう話から言うしかないなというところですかね。

【濱 博一】後付けなんですね。

【畦地履正】後付けですよ。その場では分からないようにしていますね。

【赤須治郎】地元の方からも「どこに行っているのかよく分からない」と言われ、畦地さんはブログを始めたということです。そうしたら、飲んでいる話ばかりが載っています。では、次の回答に行きましょう。

回答2「それ、まちがってないよ」

【常光利恵】常光です。私はいつもいろいろなことをやっているのですけれども、それが必ずしも万人に受けるとは限らなくて、いつもめげることばかりなのです。そんな時に必ず、私のケアパートナーである南出洋子が、「何言っているんやいね。分からん、あの人の方が間違っているんで、あなた(常光さん)は、それは間違っていないよ」と、これをずっと言われ続けてお

りまして。泣き泣き励まされ、お陰様で今では見事なほどの出すぎた杭になりつつあります。

回答3「こんな時代も捨てたもんじゃないな。そう思いました」

【はせがわ祐希】はい。私、はせがわ祐希と申します。よろしくお願いします。父が絵を描いておりまして、その絵に母がお話を作り、その両親の作品をデザイン、プロデュースするというのが私の仕事になっています。その作品を通して、皆様に夢であったり、愛を届けたいという思いで、家族3人でやっています。やはり思いを込めて、とにかく何かメッセージを伝えることで皆さんの日々の中で届いてほしいなということで活動していますが、こういうメッセージをいただくと、私たちの思いが届いたんだなということで、逆に私たちの方が感動をいただいています。ありがとうございます。



回答4「そんなもん自分でやれば？」

【田中策次郎】はい、私です。今、感動の涙が出るような話を聞かされた後に情けないのですが。私は中学校のPTAの会長を5年ほど前にやっていたまして、その時に教育長さんと市民会議のような感じで会議を共にすることがありました。今では当たり前になっているのですが、地域の中で「見守り隊」みたいなものがありますよね。それをまだ石川県内で珍しい時に、「こ

ういうものがあるとはかの都市で聞いたことがあるのでやってくれないか？」と言ったら、教育長が一言「そんなもん自分でせいや」と言われまして。どちらかというと「悔し泣き」です。

ただ、その時に、悔しいなと思いながらも、「ええー、くそ、ダラ」と、その場では言えませんが、何かしてやらなければと思いました。ちょうど、今日、たまたま持っていましたが、こういうような「見守り隊」と書いたステッカーを手づくりで10枚ほど作って、PTAの役員の中に「これ、車に付けや」と言って、無理やり配りました。付けてくれたのは校長、教頭、副会長と私の4人ぐらいでしたが、これをまた新聞に大きく出しました。しかし、「寺井中学校見守り隊や」と言っても、なかなか地域は反応してくれませんでした。

その後、再び「ええい、くそ」と言って、今度は地域の中での配布を実施しました。うちの村は130軒ぐらいあるのですが、私一人で130枚のステッカーを作りまして、そしてまいりました。これをまた新聞に出しました。そうしたらほかの町会長さんが、「こんなもの町でしなればどうするのだ」と言って、どうにかやっと動いてくれました。このステッカーも今日たまたま持ってきたのですが、今、能美市内に当たり前にある「見守り隊ステッカー」をやっと作ってくれました。これを出した時に能美市の教育長が、「これからは地域みんなで子どもを守る時代や」と言いまして、思わず、「おまえ、違いうやろう」と私はつつこんだのですが(会場:笑い)。そのように、まず自分が何かしなければ駄目だということ、辛抱すれば何とかなるものだという、二つを経験しました。(会場:拍手)

回答5「後でやっておいて」

【谷内博史】「一緒にどのようにしてこれから活動を進めていこうか」という話をいろいろして

いる時に「それ、いいですね」となるのですが、なった後で「じゃあ、やっという」と言われるのです。言い出しっぺがやるという、最近「リーダーシップ」ならぬ「いいだーしっふ」と言うらしいですけど。それは分かるのですが、やはり一緒にやっていきたいじゃないですか。お任せ、丸投げというのはすごく困るし泣けるんです。せっかく地域の中でみんな苦しい中でやっているの、やはり一緒にやっていくのがいい。もちろんそこには役割分担はあるのですが「やって」と人に言うだけのお任せだけは「それはないだろう」と。そういうのはちょっとありましたね。

【赤須治郎】「いいだーしっふ」でいいのかな、皆さん考えましょう。では次に。

回答6「農業続けていて良かった」



【高野誠鮮】羽咋市から参りました高野と申します。これはうれしかった一言です。新聞にも書かれたのですよね。これはどういうことかというと、そろそろやめようと思っていた農家の方が、お米のブランド化によって値段が1俵4万2000円にもなったので、「本当に続けていてよかった」と言われて。その一言で実は泣けました。「今まで役所はろくなことしてくれなかったけれども、初めていいことをしてくれた」と言われて、喜んでいいのかどうかよく分かりませんが、その時は本当にうれしかったですね。

回答7「あのときの約束どおり戻ってまいりました」

【福原義明】福原と申します。私は和倉温泉の「多田屋」という旅館に勤めておりまして、宿泊のお客様に関するエピソードです。この『恋のから騒ぎ』にはちょっと重い話になってしまいうのですが。

7年ほど前に大阪の泉大津からお見えになったお客様にお泊まりいただきました。お父様、お母様、長女のお嬢様と長男のお子様、次女のお子様の家族5人でいらっしゃいました。いらっしゃった瞬間に、お父様が寝たきりというか、車椅子というか、ほとんど意識のない状態とお見受けいたしました。事情を玄関で伺うと、その旦那様ががんで余命いくばくもなく、私どものパンフレットを病院の枕元にお持ちになっていて、「この夕日を見たい」という思いをずっと言っておられたらしくて、その願いをかなえるために家族で本当に死にもの狂いでいらっしゃったそうです。

当然そんな状態でしたので、我々も宿泊を受けるかどうかという問題もあったのですが、とにかくお受けしましょうということになり、男性10人がかりでベッドにお運びしましてお泊まりいただきました。そのことに対して、家族の皆様もすごく感謝してくださって、その時点で皆様が涙ぼろぼろだったのですが、結果的にその日の夜中の2時にその旦那様が亡くなられたのです。それで、我々もフロントから連絡を受けて駆けつけまして、とにかく家族の方々が我々に対しても「ありがとうございました。とにかく父の思いが遂げられまして、ありがとうございました」ということをおっしゃられました。最後まで、とにかくお世話をしたいというのは、我々宿泊施設の使命ですので、葬儀の棺の手配をして、霊柩車で泉大津まで私どもと一緒に添って参りました。お葬式とお通夜にも

我々も出席しまして、最後「お疲れ様、本当に大変でしたね」ということでお別れしました。

それから1週間ほどしまして、高校1年生のお嬢様からお手紙をいただきました。「本当にありがとうございました。とにかく感動で胸がいっぱいです」と。「私は介護士の仕事をするためにアメリカに渡って勉強し、成長して稼いだお金で必ず家族みんなで帰ってきます」というメッセージがその手紙に託されていました。それから5年経った時、我々もずっと気にはかけていたのですが、5年後の命日の日にご予約をいただき、帰ってこられました。成長したお子さんとお母様から、「あの時の約束どおり戻ってまいりました」という言葉をいただいた時に、私どもも泣けてしまいました。(会場：拍手)



回答8「新しいことをやるには、新しい奴がやるべき」

【木下 斉】福原さんのあれだけいい話の後にしゃべるというのは、相当やりづらいですが。私は商店街活性化に必要な事業開発を全国あちこちでやらせていただいています。その発端は私が高校1年の頃から早稲田の商店街活動に関わっていた関係で、高校3年の時に全国の商店街の方が商店街ネットワークという会社をつくるということで、そのお手伝いをずっとやっていました。その会社がいざできるぞといった時

に、「社長は商店街の人がやるのだろうか」と思って、私は登記の手続きなどを進めていました。なぜ高校生がそんなことをやるのだという話なのですが、皆さんから「忙しい」と言われて、先ほどの「いいだーしっぷ」に近いのですが、言い出してもいないのにやらされていました。ただ、全国の方と連絡をとりあいながらプロジェクトを推進することが自分としては楽しく手伝っていました。

そして、いよいよ商店街がネットワークをつくっていろいろな新規事業をやっていくのだということになり、「誰が社長をやるのだ」という話になりました。早稲田の商店会の会長の安井さんとほかのメンバーもみんなで集まって全国の関係者のところへ行った時に、「これから新しいことをやる。自分たちは今までさんざんやってきたけれどうまくいかなかった。うまくいかないから新しいことをやる。だから、新しいことをやるには新しいやつがやるべきだ」。そして、「なあ、木下」と。そう言われて、そのまま僕がそれを引き受けてやることになりました。そんな経緯で高校3年の時に商店街ネットワークという会社ができて、私は苦節ではあるのですが、今までその会社もやっています。

その時はそんなに感動というものはなかったのですが、あの時こういう言葉がなければ、恐らく今私はこの壇上に立っていないということを思うと、何の血のつながりもない人の言葉ではあるのですが、自分の両親以上に自分の人生を変えた大きな一言だったなと思います。そのことを今になっては思い返すということで書かせてもらいました。(会場：拍手)

【赤須治郎】 高校3年生で社長になったのですか。すごいな。

回答9「ずっと二人で」

【畦地履正】 四万十ドラマの畦地です。「ずっと二人で」というのは、何か格好いいですね。また、前列から濱さんがこっちを見えています。

僕は四万十ドラマの活動から、「円陣」に呼んでもらっています。四万十ドラマという会社が始まって15年経ったのですね。その15年というのは、実は良いことばかりではなくて、本当に失敗もあり、行く先々、例えば商談しに行くと、“ぼろちゃん”に怒られ、いろいろなことを経験してきました。その中で一緒に歩いてきたやつがいるのですね。迫田というデザイナーです。地元でデザインをやってもらいながら僕と一緒に歩いてもらったのですが、この15年、この二人が行く先々で怒られたこと、それが実は僕らの肥やしになっている。今どこへ行っても別に恥ずかしくない、「僕らのやっていることを思い切り言えや」と。これは、例えば商品開発のノウハウであったり、地域づくりであったり、そういうもののノウハウが僕らはできたではないかという話を、ずっとこの15年してきたのですね。それで、15年を振り返るというイベントを先日11月1日(平成21年)にやった時に、その前に彼が言ってくれたのですよ。「これからはずっと二人で頑張りましょう」と。本当にこれは涙が出ました。

赤須さんにも来てもらったのですが、その夜に15年をお祝いする会がありました。会では彼が本当にバカになって、みんなの前で笑わせたり、楽しませてくれたりしたのですね。そのことに僕は涙を流して、「やっぱりこいつと二人これからもやっぺいこう」ということで、この「ずっと二人で」という言葉が僕の中にぐさっときた言葉ですね。(会場：拍手)

【質問2】

あなたの活動に基づく実話ドラマ そのタイトルは？

【赤須治郎】次のテーマに行きましょう。最初の方は演歌のようなタイトルを付けられました。

回答1 「こころ次第だよ人生は♪」

【定免久美子】「NPO法人わくわくネットはく」の定免です。これがまさしく自分の人生でもあるなと思ったのです。市民活動をしている方は、結構心というものを大事にしながらしているのではないかと思います。いろいろな場面、場面が生じると思うのですが、例えば私の場合は、今年度から「わくわく」の方へ来ましたが、それまでは行政、役場の職員でした。

行政の中にいる時に、行政内の連携をするという事業を担当しました。連携すると必ず誰か汗をかかなければならない人がいるのです。でも、それをすると皆さんは本当に嫌がるのですが、私はそれをしたら自分が得をしました。というのは、講座をやっていたのですが、健康福祉課、商工観光課、それから総務課などいろいろな形で連携した中で事業をやっていた時に、私が一番まとめ役みたいなものをやりました。講師との連携、企画の内容など。その時に逆な面を言うならば、私が一番時間を取られ、準備からいろいろなものにかかわりましたが、振り返ると私が一番得をしていた。そのいろいろなことが私の人生を変えたと思っています。そう思うと、決してマイナスはマイナスだけでなくプラスであると。市民活動の中でもそういうことがいっぱいあるように思います。それは私が細かく言うより皆さんの方がご存じだと思います。私は与えられた環境をどうするか、マイナスをどうプラスで見ることができるか。そこ

は心次第かなと思いました。そういう意味で、心が変われば最後は人生が変わると、そういう意味で「心次第だよ、人生は」としました。

回答2 「ミイラとりがミイラになった。」

【阿部圭宏】実は私も定免さんと一緒に、もともと自治体職員をしていましたが、何を思ったのか辞めてしまいました。滋賀県で「おうみネットワークセンター」でNPOの支援活動を6年やっていたのですが、その間、石川の地域づくりの人たちともずっと交流があつて。でも、こういう世界を知ってしまった不幸ですね。いや、僕は今幸せなのですけれども。それで、そのまま「バイバイ」というように言って、でも実はまた今、滋賀県庁で週2日、協働コーディネーターを務めています。それももう辞めまされども(会場：笑い)。面白いですよ。すみません、以上です。



【赤須治郎】阿部さんが滋賀県の職員だったときは、地域づくりのプロパーのようになられていて、県内の活動にもものすごく詳しく、こういう活動はありますかと聞くと、三つや四つはすぐ出てきました。100以上ある団体の活動が全部頭に入っているのではと思ったくらいです。ところで休憩時間に高野さんがミイラの話をしていましたね。

【高野誠鮮】ミイラというのは腐らないのですよね。枯れているのですよね。ミイラのすごいところは何かといたら、普通人間はミイラに

なろうと思うと大体腐るのですよ。ミイラは腐っていないですよ。即身成仏でミイラになろうとする時には普通の人は腐るのです。「臭いな」と言われて腐ってしまうのです。でも、即身成仏をやろうとした時に、修行をして、そして即身仏になろうという人たちはすべてミイラ化しているのです。これは何かというと本物は腐らないのです。野菜で腐る野菜がありますよね。これは偽物なのです。本物の野菜は枯れるのです。

例えば、木村さんという方がいらっしゃいます。9カ年かかって10年目にやっとリンゴを無農薬で作った方がいるのです。この方が来年(平成22年)の2月20日、羽咋にお見えになります。そして自分の苦労話をさせていただきます。僕らは何を考えているかということ、神子原(みこはら)というエリアの村で一回、本当の野菜を作りたいのですよね。そのために若い職員を二人、木村さんのところへ勉強にやらせたのです。そして、その木村さんが作る野菜は腐らない野菜です。バクテリアに強く、リンゴが2年間腐らないのです。枯れるのです。まさにミイラなのです。

【赤須治郎】ありがとうございます。次も高野さんですね。

回答3 「にぎやかな過疎の村」

【高野誠鮮】また私です。その神子原というところは高齢化率が非常に高く、菅池というところは五十何%もあったので、そういう村はなくなるのです、消えるのです。その村を考えた時、「どんな村にしようかな」と思った時に、「にぎやかな過疎の村にしまえ」と。夏場、合宿などで女子大生が来ます。いっぱいいるのですよ。にぎやかですよ。洗濯物がカラフルになるのです。普通は白黒なのです。白の世界なのです。ピンクがあつたり、黄色があつたり、

すごく色がカラフルになるのです。特に女子大生が入ると、村は親父連中が喜びます。18年間子どもがいなかった村に若い子たちがぞろぞろ来るのですから、これは親父連中元気になります。若い男の子を見ると、おばあちゃん方がものすごく元気になります。そういう過疎の村を目指しているのです。

面白い過疎の村というか、話題性があって、それで人がたくさん集まってくる過疎の村。今年(平成21年)の7月号から、角川書店が出している「野性時代」という小説がいっぱい並んでいる雑誌に、田口ランディという作家、彼女が作った作品があり、舞台はここなのです、羽咋なのです。能登一円に舞台が少しずつ動いていきます。何をしているのかというと、能登を舞台にした小説を作っているのですよ。『マーガナル』という小説ですけれども。私たちがやろうとしているのは、企業誘致ではなくて人心誘致なのです。人の気持ちを能登に向けようということを実はやっているのです。そのためにいろいろなことを仕掛けたりやったりしているのですが、そういうにぎやかな過疎の村というのを実は目指していて、これがテーマなのです。

回答4 「必殺！仕置き人」

【木下 斉】あまりひねりのないネタで、そのまま書いたのでさらっという思うのですが。私の活動は中心市街地や商店街の活性化などが多いので、あまりひどい人が出てくると、「どうにかして仕置きしなければいけない」ということが、結構しばしば発生するのですよね。その時に一人だと難しいので、大体複数人で入りまして、先ほども第4分科会でちょっと話していたのですが、私のパートナーの一人である矢部さんという人が、「矢部ノート」というノートを持ってまして、会議中に寝たりとか聞いていないとか、質問に答えられない、もしくは質問

が的を外しているという人を、どんどんそのノートに書いていきます。2回目からその人たちは席順を替えてもらうというのをどんどんやっていくのですね。それから「会費制会議」というのもあります。お金を払わないと参加できない会議です。入口に募金箱を置いて、会社経営をやっている方は1回1万円、会社員や学生は2000円にしておくと、あまり関心がないとか余計なことだけ言おうという人はだんだんいなくなっていく。そういう仕組みをいっぱい持っています。そういうネタだけを仕込んだドラマでもやろうかなというので書かせてもらいました。

【赤須治郎】もっといろいろな仕組みを聞きたいですね。詳しくは全体会の後の懇親会の時に聞いてください。

回答5 「RIVER」



【畦地履正】はい、川の流れのように。川の流れのように自然に逆らわないということを物語にしたらいいのではないかとということで「RIVER」ですね。高知県は何と森林率が84%あるのですね。これは全国1番なのですよ。海に面した高知県、海のない岐阜や長野。岐阜は実は82%なのです。その中で高知県は84%あるのに、森林というのは今すごく山が疲弊していて、林業が儲からないとかいろいろな話をしているのですが、今時代は変わって、「森林はCO₂を削減するマシンだ」と。

高知県の何と84%の森林率はCO₂を吸収する巨大なマシンに替わるのです。これに対していろいろな企業がお金を出す時代になって、ひょっとしたらBMWという車の会社が、「うちはCO₂をいっぱい出しているから、高知県の山に10億円、100億円お金を出そうではないか」という時代が来ると思うのですよ。その時代に、山から生まれる、森林から生まれる副産物、これと海と山をつなぐのは川だということで、川の物語、そして山の物語というのは広がっていくような時代がやっと来たかなというところですよ。高知県の一番有利な数字を84%、「84」と言ってみれば新たな戦略、ソフトが生まれてくるのではないかと、そのつなぐ役割が、この「RIVER」だということで、「RIVER」というタイトルにさせていただきました。

「森林率日本一の高知県」を覚えておいてください。ありがとうございました。

回答6 「何もない」

【北林昌之】七尾市の一本杉通りの北林です。うちの地域は町おこしをして6年目ですが、かなり観光客、視察の人が来てくれます。だけどみんな「ほとんど何もないね」と言います。実際、先月(平成21年10月)から、観光バスで4台、3台、5台とか、一月ほど来ていただいた。その人は下見に来て、「ああ、ここは何もないね。30分で終わりだ」という話でした。

一本杉通りがやっているのは、語り部処、ふれあい観光です。それぞれの語り部のところに行ってもらわないと何もない町なのです。何もないので、語り部処というノリでやったのです。それを2~3軒入ると、「これは大変だ」ということになりました。一本杉に来たら半日かかるなど。それぞれの語り部処でいろいろなお話をさせていただいています。我々ができるのはこれしかないかと、今やっているわけです。

七尾市も見ていると、今年(平成21年)もこの10カ月で人口が600人くらい減っているのですかね。どんどん減っている。どこでも同じだと思うのですが。そういうところですから、交流人口をいかにして増やすかということは、我々の市に対してできる仕事かなと思います。一生懸命交流人口を増やすことを考えて目標にして今頑張っています。何とか少しずつ一本杉に来てもらえるようになって、何もないけれども、どこでも頑張ればできるよと。

我々のテーマは「茶の間の観光」です。我々のうちへ来ていただいて、地元の人と旅の人が話をしてもらえばよいではないかということで、今ぼつぼつ交流人口を増やす努力をしています。ぜひ皆さんも来てください。



【赤須治郎】次は……。

回答7 「私は何も分からない人ではありません」

【赤須治郎】これは？

(南出さんと常光さんが、前に出て、カツラをかぶり、芝居を始める。)

☆☆☆……………

♪



【南出洋子】(以下、南出)「あら、ごろざんさんのとっちゃん。今あんたのうち、行こうと思うたんや。」

【常光利恵】(以下、常光)「あら、かつきよもんの洋子ちゃん。私、うまいカキ二つもろうたもんで、あんたと一緒に食べればどうかと思って持ってきてんて。」

【南出】「あら、うれしい。ありがとう。」

【常光】「ねえ、今日もデイサービス、面白かったね。」

【南出】「おいね、面白かった。そやけど、うちにおると怒られることばかりでね。」

【常光】「おいね、毎日。」

【南出】「あんたもか。」

【常光】「うん。デイサービス行く時に、うちのねえさん言うこと、『あら、ばあちゃん。また昨日と一緒にの服着て。私が恥かくがいね』と言うて、玄関で追いはぎにおうたようなもんや。ぺっと替えさせられて。」

【南出】「あらおそろしい。ほんでも、実の娘もよう似たもんやよ。」

【常光】「そうか、娘なら優しかろう。」

【南出】「私かてね、ちょっと何か話すると、『あら、ばあちゃん。聞いた聞いた。また同じ話ばかりして』ってすぐ怒るがやて。」

【常光】「ねえ、何やら80すんだら、何もかも

私ら分かん人やと思うて。」

【南出】「そんなことないがにね。分かっところとばかりやわね。すぐダラにして。」

【常光】「そうやわね。うれしいことも分かるし、悲しいことも涙出てね。」

【南出】「そうやて。ほら、前にね、能登で大きな地震あったがいね。」

【常光】「もうあれから 30 年ほど経つけ？」

【南出】「そうやろう。30 年は楽に経つとるやろう。」

【常光】「ああ、そうか。30 年前のことだって私ら覚えとる。」

【南出】「すごいがいね。そうしたらあの時ね、デイサービスの人やったけ、ほら義援金やったけ？」

【常光】「日赤から回覧板が回った。」

【南出】「そうそう。あんなのがうちでも回っているかもしれんけれど、ここにも回ってきたもんで、『したい人だけしてもらえるとありがたいがやけど』と言われたんや。そうしたらね、私かて思うたわいね。それはうちには来ている。でも、うちではとうちゃんがやっておってや。」

【常光】「そうや、あんちゃんの財布から出たがや。」

【南出】「そうそう。私はその時は出していません。それで、デイサービスでそう言われれば、私かてないことはないものの・・・。」

【常光】「出す、出す。」

【南出】「ねえ、能登にそんな私らとよう似た年の人で、かわいそうやなと思ったら、やっぱりね、年金暮らしだって出すわね。」

【常光】「出すわいね、あんた。あら、いとしやと思うわいね。」

【南出】「そうやね。」

【常光】「ばあばになったら何も出さんでもいいというように、そんなダラにせんといってもらいたいこっちゃ。」

【南出】「ねえ。」(鳥：カーカー)

【田中策次郎】(以下、田中)「夕方になつとるがに、洋子ばあちゃんに、利恵ばあちゃん、こんなところでまた立ち話しとらんと、そろそろうちに帰らんか。」

【常光】「夕焼けか。」

【南出】「あら、知らん間にこんなところで。」

【常光】「あんた、田中のあんちゃん、いつも私らに声かけてくれて。」

【南出】「見守り隊やもんね。」

【常光】「そうやて、本当にね。」

【田中】「帰ろう、帰ろう。」

【南出・常光】「はいはい」

(あかとんぼ合唱♪)



.....☆☆☆

【赤須治郎】常光さん、この寸劇は練習したの？

【常光利恵】いえ、しません。いつもこれからです。

【赤須治郎】「何も分からない人」というのは認知症のことだったのですね。では、テーマを変えましょう。

【質問3】

地域づくりをお芝居に例えると、 あなたの役回りは？

【赤須治郎】最初の方は「照明」です。

回答1「照明」

【常光利恵】私の名前は生まれた時から常光です。今なお常光です。常に光ると書いて常光です。ですから、ずっと「何も分からない人」、「とんでもないわ、分かるとるわいね」というところにピカッと光を当てて、照明係です。(会場：拍手)



回答2「助演、プロデューサー、演出、照明 大道具、…その時々シチュエーション により多数」

【福原義明】あくまでも石川県、能登半島にいらっしゃるお客様が主役であることは間違いないので、その時々に応じて、我々はいろいろな役割を演じることがあるので、お客様が能登にいらっしゃるというストーリーの中でいろいろな役回りを演じるという意味ですね。

【濱 博一】今、福原さんが言われましたが、僕もやはりそうですね。僕らの仕事はコーディネーターですが、現場を知らないコーディネーションというのは最悪なので、自分でコーディネーターをやりながら実は現場を持っていたり

します。現場に行ったらいろいろなことをしなければいけないので、その時によって何をやるかが全部変わります。逆に、いろいろなことがやれないと恐らくはプロデューサーとかコーディネーターはできないのではないかなという気がしていますね。

回答3「裏方」

【北林昌之】まちづくりは裏方をしていないと。前を走っていると、後ろを見たら誰もいなかったりするということで、一番後ろにいて皆さんを押さなければ駄目かなということで、裏方ということでぼつぼつ。裏方をやったおかげで、今日は能登演劇堂の舞台に立てました。皆さん裏方をやってくださいよ。(会場：笑い)

回答4「大道具」

【谷口健一】別に「大道具」というわけではないのですが、消去法でいったら、これしか残らなかったのです。もちろん主演でもないし、プロデュースでもないし、いろいろ考えていったら、大ざっぱなところで力を出して、ざざっと片づけると、とにかく一番ひどいのをやっているればよいのではないかなという気はしますね。



回答5「大道具」

【南出洋子】私、認知症の方のデイサービスをやっていますので、一日に1回は一人一人が主役になれるように、私はそのためのバックであったり、マイク持ちであったり、照明係であっ

たりということで、「大道具」とさせていただき
ました。

回答6「演出」

【はせがわ祐希】今、皆さんいろいろなお話を聞かせていただいて、私はダイレクトにまちづくり、地域づくりということではなくて、作品のメッセージを通して皆さんの代わりに、皆さんの思いを、アートを通して表現して、皆さんと共有し、それを分かち合えたらなということで、現実というものをもっとより素敵に伝えていく演出をするのが私たちの役割だと思っています。ありがとうございます。

回答7「脚本家(原作者)」

【木下 斉】私がやる時には、特に町の中心部のところは監督をやるのは、地元の私が一緒にやる、パートナーになる地元の方が監督になるのですが、私は一応筋書きだけは全部書くのです。特に私はまちづくりを事業としてやるということを専門としているので、どういう事業プランで、どのようにやっていくのかという筋書きを書いた上で、それを生かすも殺すも監督次第なのです。ただ、いい監督と出会うといい舞台になるし、こういうモデルでこうやってやりましようと言っても、気持ちフラフラな人が監督をするととんでもないお芝居になるということがありまして、ただ、自分は全力でその町に必要な事業に関してはきちんと筋書きを書くというところで脚本家というか原作を書く人間として頑張ろうということでやっています。

例えば、私も共同代表を務めている熊本城東マネジメント株式会社 (<http://www.kjmc.jp/>)でも、地元商店街の南さんという方が地元の監督。私はその事業戦略を考えて、地元に入り込みながら南さんと推進する。それ以外に必要な人材を地域内から南さんが、地域外からは私が

連れてくる、みたいな連携プレーです。私だけでもできない。地元だけでもできない。そういう良い意味での相互依存関係を築いてプロジェクトを推進することは非常に重要です。

回答8「作家」

【田中策次郎】名前が策次郎といいます、企てる方の悪い方の策ですよ、策略家の策。どちらかという作家よりも策略家。市民活動などをやるに当たっても、やりたい人とか何か手伝うという人はたくさんいるのです。けども、誰かがそのきっかけをしなければ動けないという人も、また大勢いる。そういうところで、先ほどの見守り隊でもそうですが、何かアクションを起こして、「さあみんな一緒にやってみようか」というように風を流して、みんなを扇動するという意味合いで書きました。



回答9「プロデューサー」

【水野雅男】短く言うのは難しいですね。背景を言わないで端的に言おうとすると、その地域にどういう資源があるのかということ。それを組み立てて町づくりの活動や事業にしていく。そしてそれで演ずる人を組み合わせて、それで、実際に運動にしていくという意味で僕はプロデューサーとしました。プロデューサーなので、皆さん演ずる人たちは主役なので、その地域の人もそうだし、参加する学生もそうですが、いろいろご機嫌をとったり、お世話もしなければいけないし、一番大事なものはお金の工面をしつ

かりするということですね。責任を取る。何かトラブルがあったら、まず、最初に謝りに行く。そういう意味でプロデューサーの役割かなと思います。

回答 10「プロデューサー」

【高野誠鮮】「P」と書かせていただいたのは、実は僕は前職はテレビマンなのです。テレビの深夜番組を作っていました。全国PTA協議会から批判を受けた「11PM」にかかわってまして、「水曜 11」を作っていたのです。プロデューサーというのは何かといたら、しかもプロデューサーだけでは駄目なのです。企画、構成、演出、この三つができるプロデューサーという意味なのです。お金を集めてくる、そして企画・立案ができる、構成ができる、演出ができる。演出は何かというと、どの町会長にこういう発言をこの時にしてほしいというのをつかっているというPが務まらないのです。反対する人もいるし、賛成もいるし、無関心もいるのが集落なのです。そこで何か一つドラマを作る、何かものを成し遂げるといふ時には、必ず配役が必要なのです。賛成する人もいますし、「わしは絶対反対だ」という人も必ず出てきます。その人が突然、心が変わって別のせりふを吐くのです。そのせりふ、脚本ができなければいけないのです。ですから、実はプロデューサーであっても企画、構成、演出ができるプロデューサーだという意味で書かせてもらったのです。

回答 11「わがままで欲張りなプロデューサー」

【定免久美子】こうしたいなという、まちづくりの夢がありまして、その夢は一人ではできない。先ほどのお話にありました「お金を集める」ために、一生懸命企画書を書いたりしているのです。そして、講師の先生を、どの方にどの講

座をお願いするか考え、口説き落として来てもらうのです。そうしたら来られても、スタッフと一緒にやるのですが、私は筋書きがなかなかすぐできないものですから、その時、その時で変わることが多々ある。そういう場面、場面があるものですから、ある講師の先生に「あなたは、欲張りでわがままですね」と言われた一言がずっと心に残っています。でも、良くしたい、良くしたいと思うから、優柔不断になり、「では、どうしようか」ということも。



実は今、志民塾というのをやっています、11月28日(平成21年)に4回目の講座をやるのですが、これはどのように展開すればよいのか、まだ頭の中で決まっています。それで講師の先生とどう打ち合わせしようかと思っているのです。ですから、皆さんに本当に迷惑をかけています。これは良くしたい、良くしたい、その一途な思いゆえのことです。これをわがままと言うのか、良くしたいという素晴らしい心なのか、そこはちょっと分からないのですが、ただ、いつもいつも欲張りだなと。企画書一つ書いても、すごく時間がかかってぎりぎりに出しています。お金を欲しい一心にそれを書いています。どのようにすればお金をくれるのだろうか、どのように書いたら向こうは採択してくれるのだろうか、その下心も十分入れながら、けれども欲しい一心で、けれども結果的には羽咋市民が住んでよかったという町をつくりたい一心でしています。ですから、周りに振り回されてい

る人がたくさんいるのではないかと申して訳ないと思っています。そういうわがままで欲張りなプロデューサーです。

回答 12 「稽古場の鏡とタオル」

【谷内博史】質問には「役割」と書かれていたので、本当は人にしなければいけなかったかと思いますが、物でいいやと思ってですね。これは何かというと、先ほど木下さんは筋書きがあるよとか、台本があつて、地域づくりをこのようにやっていて、こうなって、こうなるのだとおっしゃっていました。台本があればいいのですが、結構筋書きのないドラマというか、筋書きが見えない場合がすごく多くて、そういう時に私などはいつも思うのは、地域の人たちと一緒に悩みます。ですから、台本以前の稽古場のところで鏡に向かって黙々と練習してみたり、シミュレーションしてみたりやっている中に、だんだんと筋書きがぼやっと見えてくる、台本ができてくるみたいなのがすごくあるなと思っています。台本を考える時というのは本当に汗をかくのですよ。タオルで一緒に汗をかい、ふきふきしながらやっていく。そういう台本づくりの前夜みたいな状況にいつも立ち会っているなという気がしています。

【赤須治郎】谷内さんが鏡にしているのは、何を鏡にしているのですか。

【谷内博史】やはり自分のやっていることを時々客観的な視点から見てみるということですかね。そういう鏡になりたいみたいなのがありますね。お互いが、自分がどういうことをやろうとしているのかというのを鏡に写して、ほかの人からどう見えるのかな、共感は得られるとか、どのようにしたら一番効果的なのかなとか、専門家の目といいですか。そういうことをいちいち考えながら台本を作っているのではないかなと思うのですけれどね。だから素晴

らしい脚本家や筋書きを書ける人がいるところはよいのですが、いないところの方が多いではないですか。そうしたら結局、鏡の前でやっているつもりで、自分自身のいろいろやっていることを先生にしながら、台本をだんだん浮かび上がらせていく、筋書きを書いていくということがあるなと思っています。



回答 13 「ローカル」

【畦地履正】「ローカル」という意味は、ネットワークをつくるという意味なのですね。都会と田舎をつなぐという意味で、地域でも先ほどのプロデューサーでもあるかもしれません。演出家でもあるかもしれない、企画もするかもしれませんが、僕の役割はやはりネットワークをつくること。ネットワークということはローカル、地域が豊かでないといけないですね。豊かであるということを僕から見つけ出してきて、それに対して全国に向けて、四万十はこんなところなのだとすることを訴えかけられる人間であるということが僕らの役割になってくるのではないかなと。やはりローカルとネットワークがつながっていくことによって、四万十や能登が豊かになる、これが一番ではないでしょうか。

【赤須治郎】畦地さんからいろいろな役割が出てきましたが、常光さん。

【常光利恵】私、もう自分の番が済んだと思って、ゆっくりしていたの。ゆっくりさせて(会場：笑い)。

【赤須治郎】分かりました。自分の役割を説明しようとする、たくさんのことをしゃべってしまいます。地域づくりを始めたばかりの方は、こんなにたくさんの能力が要るのかと、躊躇するかもしれませんが、パネリストの皆さんの共通点は、現場の経験を積んでいることで、そこから得られたことを話されています。皆さんも、現場で学びながら自分の役割を考える習慣を身につければ、幾つもの役割を果たせるようになるのではないのでしょうか。

【質問4】 よく使う「殺し文句」「キメ台詞」は？

【赤須治郎】では、最後の質問です。どうすればみんなに動いてもらえるのでしょうか。

回答1「もちろんです」

【福原義明】お客様からさまざまなリクエストや相談をお受けするのですが、とりあえずどんな無理難題であっても、「はい、もちろんです」とお受けするのです。まず受け入れるということですね。そういった意味で常日ごろ使っている言葉です。

【赤須治郎】効果はありますか。

【福原義明】もちろんです。(会場：笑い)

回答2「一緒に風船を届けてください」

【はせがわ祐希】本当に舞台のせりふみたいな一言ですが。私の伝えている作品の中にスターリマンという夢をかなえる九つの風船をみんなに届けているというキャラクターが出てきます。その九つの風船は「希望、元気、勇気、夢、愛、友情、未来、信頼、幸せ」の風船で、これは皆さんの思いが込められていて、それぞれが届けあっているということを作品を通してメッ

セージにしているのですが、ぜひ皆さんの夢だったり、これからの思いを、それぞれが届け合いながら、そして自分がないものを相手から支えてもらったり、そして自分自身が持っていて相手に足りないものを自分が分け与える。そういったお互いのことを尊重し、そして自分自身の役目を生かし合ってということで、きっといろいろなもの、家族だったり地域だったり社会、それこそ日本中、世界中というのが本当に良い形で未来に続いていくのではないかということで、「一緒に風船を届けてください」というメッセージを伝えています。

回答3「ぼつぼつ」

【北林昌之】私はたまたま町会長をして町づくりにかかわることになったのです。ですから、町会の方全員の総意が要るわけです。その時に何事も必ず反対の人もいるし、いろいろ言う人がいて、「ぼつぼつ」と物事はやらなければ町会というのは動かないわけです。普通、商店街などは一緒にやろうという人だけが固まっているわけですからやりやすい。しかし、町会でやる時はものすごく難しい。公園を一つ造るにしても、賛成と言うけれど、うちの隣へ来たら、「これは駄目だ、あんたやめてくれ」とかというのを、一つずつお話をしながら、ぼつぼつやるということ。町会で物事をやる時に、例えば、「ゴミゼロ宣言やるよ」「ゴミの計量をやるよ」と決めて、大体30%くらいの人が賛成してくれば、ぼつぼつやるかと。ただし、1年ごとに増えていかなければ駄目です。30%の次の年は半分ぐらい、50%ぐらいいくように、この努力はしていかなければならない。何事もただそれで終わっては駄目で。それでぼつぼつやってきた一本杉は、今こうして注目されるようになってきたのです。何事もそうです。ただ、少しずつやっているのは、今見たら一つずつぼつぼつと花が

咲いてきたのです。

私たちは朝市もやっています。一本杉公園というのをつくって、最初は2人の業者の方が一本杉の人のために朝市をやってくれた。その朝市もただ売るのではなく、「この野菜を使ってこういう料理を作るのだよ」とか、「これはこのようにして私は畑で作っていますよ」とか、交流をするのです。ただ、売るとか買うのではなくて、そういう話し合いをしていつも楽しくやっているのです。そのお蔭で、テレビ朝日が番組で取り上げてくれて、ぽんと花開いた。花嫁のれんも、「銀花」という雑誌が取り上げて、ぽんと花が開いた。今までやってきたことが、ぽつぽつ少しずつ花咲いてきたかなと思っています。

ゴミゼロ宣言も今年(平成21年)が6年目かな。生ゴミは毎日計量して記録して出します。これは町内の方の発想で、女性も体重を記録するとスマートになるということからヒントを得て、ゴミも記録すれば減るだろうということで、ゴミの計量を記録しています。大体2割減りました。大体限界かなと思うのですが、そのことで記録すれば減るよというのがみんな分かってきて、次は電気、ガス、水道を記録しようと、各家庭に表を配ってあります。生ゴミで減ったのだから、電気も書けば減るよ。1割減ったら、年間何万円かの金が浮いてくるよと、そういうところに目を向けてほしいということで、それもぽつぽつやってきた結果です。ただ、それもみんな町会長が言うわけではないです。町民の方からゴミゼロ宣言をしないかとか、これをやらないかと出てくると、町会長はやらなければならないかなと。もたもたしていると、町会から「何をしている」「せっかく町民が良いことを言っているのに、おまえは何をぼけぼけしている」と言われながら、少しずつやっています。やはり、ぽつぽつということは大切なことで、いつもぽつぽつと言って続けています。しかし、

やはり前へ進まなければ駄目だと思います。昔は私もいろいろな話を聞いて、燃えて帰ってきても、一本杉通りの入口の仙対橋を渡ると、「まあ、いいか。寝よう」ということで何十年もやってきたのです。やっこの年になって初めてまちづくりに燃えたというので、「もっと若ければよかった、残念ながら遅かったかな」と思いますが、次に若い人たちに引き継いでもらって頑張ってもらいたいと思っています。よろしく。

回答4「覚悟」

【阿部圭宏】武士が斬りつける覚悟ということよりも、斬りつけられる方です。市民活動や地域づくり、もっと責任を持ってやるべき。覚悟を持ってやった時に、すごくステップアップするのですよ。だから全部が全部そういうことではなくて、すごく覚悟した姿を見ると感動するので、そういうのを僕もいろいろな場で使うのですね。良い意味で使っています。最後に当てさせていただいてありがとうございます。申し訳ないのですが、ここで退散させていただきます。今日中にどうしても滋賀県へ帰らないといけないうので。皆さん、ありがとうございました。(会場：拍手)

【赤須治郎】では、阿部さん、お気をつけてお帰りください。

回答5「みんなではやらない」

【木下 斉】先ほどお話があったのですが、最初に言葉で全員を説得しようというのは絶対不可能です。商店街のような商業者同士の集まりでも、賛同を100%にするというのは不可能なので、一番良いのは「勝ち馬戦略」と思います。最初にちょっとの賛同者で小さい成功をつくって、あとは関係者の理解に従って勝ち馬に乗らせて、結果として同意をどんどん取りつけていくというやり方をするのが大体定番なのですね。

最初からみんなでやろうと思って形ないものを言葉だけで説得しようとするに力をかけすぎると、物事が先に進まないまま、みんなにお願いして回るというので、町づくりをやっている人がいつの間にか町づくりの組織の中の一番底辺のところだけをやることになってしまうということが非常に多いのです。地域活性化のプロジェクトなどはみんなそうなのですが、商店街だけではない、ほかの私が関わっている様々なまちづくり事業を推進するNPOやまちづくり会社もそうなのですが、最初からみんなでやらないで、まずは一部の本当に信用に足る人間たちで小さい成功を生む。そういうことを言う時に、最初は「みんなではやらない」という言い方をあえて私はして、みんなでやろうと思うと、それだけですごく苦しくなってしまうと前へ進めないということが多いので、最初はみんなではやらないと。信用できる人物たちでまずは最初の一步を進もうということを言わせていただいています。

【赤須治郎】最初は何人？

【木下 斉】最初は3人から5人くらいで十分ですね。それで成果は十分出ます。問題なく出せます。私がアドバイザーを務めているグリーンバード (<http://www.greenbird.jp>) というNPOも、最初に1支部作って、今は全国で28支部があります。そういうのがどんどん広がっていくのも、最初はわずか2人、3人でゴミ拾いをし始めたりするところから広がっていくことというのは、自分も町づくり系でよく一緒に体感をしているので、だからここは自信を持ってみんなでやることだけが広がる引き金ではないというように思っています。結果的にはみんなでやるのですが、ただ最初からみんなを集めようと思うと、それは到底難しいところです。

【赤須治郎】なるほど。あえて「一緒にやりましょう」と言わずに。

【木下 斉】やりたい人だけでやる。



回答6「おまん」

【畦地履正】すみません、「おまん」です。「おまんしかおらん」と。来年(平成22年)、高知ではNHK大河ドラマ「龍馬伝」がありますが、龍馬の言葉で「おまんしかおらんろ」と。あなたしかいないということなのですが、「おまえしかおらんではないか」と、それを高知では「おまん」と言います。「おまんしかおらんろや」と、「やっぱり一緒にやろうや」と、それは口説き文句の最後の言葉ですね。これは龍馬も使っていたと思います。龍馬は人をだますのが上手だった。まさしく高知はだましながらやってきたというのがいいので、僕は「おまん」という言葉が大好きで、「おまんしかおらん、おまんしかおらん」ということで人を口説き、だまかして地域づくりにも入らせる。しかし、入ったら、何か面白くなってきて、その人が儲け出したり、楽しくなったりする。そんなことのきっかけ、入口が「おまん」ではないか。最後の出口はやはり、その地域が豊かになったり、先ほど言ったようにお金が入ってきたりということが、この地域に生まれれば、非常に入口と出口が分かりやすい。やはりその中にはビジョンが要るのですね。やはりビジョンがないといかんと思うので、「おまん」という入口で、最後のビジョンは「到達目標は何ぞや」というところが口説き文句の一つの入口ではないかと、四万十ドラマではいつも思っています。

【赤須治郎】木下さんが言ったことと似ているのでしょうか。

【畦地履正】一緒です。もう一つ言えば、高知県が来年(平成 22 年)夏にアンテナショップを銀座のど真ん中に建てます。銀座のど真ん中に建てるのですが、何と沖縄県のショップの横です。沖縄のショップはめちゃくちゃ人気のスポットで人が入っている。その横でコバンザメのように高知県はアンテナショップを建てるのですね。片や今、山形県がアンテナショップを建てている。山形県ではアル・ケッチャーノの奥田さんというイタリアン料理の有名シェフの方にそこで料理屋さんをやってくれと言って一本釣りしたわけです。そうしたら山形のアンテナショップはすごくはやり出した。しかし、高知には今ビジョンがないわけです。「はい、みんな一緒にやろう。何か高知の商品を集めて一緒にやろう」といっても、「こんなものが成功するかいな」と、高知県民でありながら心配をしている私です。先ほど言ったように、誰かから、やはり二人三人からどんどんやった方がよいのではないかと思います。だから「おまんと一緒にやりたい」「おまんとかやれない」。そこから始まってだんだん広がったら面白い、その方がよいと思っています。拍手がないよ。(会場：拍手)。

【赤須治郎】次は「とてもいい質問」。誰だろう、こんな調子のいいのは。

回答7「とても、いい質問！」

【谷口健一】これは二つ意味があるのですが、まず一つ目は、質問を受けた時に、答えられない時、しばらくこれで考えさせてもらいます。これもよく使うのですが、もう一つの意味は、「そのあなたがした質問は別におかしい質問でもないし特別な質問でもないし、あなたが分からないことは特別ではないよ」ということを伝

えたいのですね。特に何人かの中で質問された時には、私はいつもこれを言うわけです。あなたの質問はいい質問だと、質問をしない人もいるのだけれども、あなたの質問をみんなで共有しようではないかということと言って、そしてそれについて一緒に考えます。こうしていくことによって、結構何でも思いついたことやちょっとしたことでも皆さんが質問をしたり一緒に考えたりする機会が増えていくのではないかと思います。

【赤須治郎】ちょっと考え事をしていました。ごめん、何を考えていたかという、「このひな壇トークは何のために進行していたのかな」と思って(会場：笑い)。そうしたら、「協働ということをやっていくためにはどうしたらよいか」のヒントが皆さんにいけばよいかなと思ったのです。今、谷口さんがおっしゃったことは、対話していく、お互いに一緒に考えていく時に、「あなたのおっしゃったことはとてもよい質問ですね」という投げかけが、一緒に考えていくきっかけの言葉になるのではないかなということをおっしゃったのだらうと、そういうことですね。

【谷口健一】あなたも「とてもいい質問」です。

【赤須治郎】というわけで、協働とか役割分担みたいなことのヒントになればよいかなと思って進めているということをあらためて思い出しました。



回答8「すごい！すごい！」

【濱 博一】先ほどの「いい質問」と一緒です。「いい質問ですね」というのは多分、質問者を応援しているのですよね。「もっと気楽に質問して良いよ」「そんなことを聞いたらおかしいのではないかと、そんな心配しなくていいから、もっと発言をどんどんしようよ」という応援になっていると思うのですが、僕もその意味で、「ああ、すごいですね。すごい、すごい」ということをよく言います。「みんなの前で言うのは恥ずかしい」というのが日本人はよくあって、ほとんどの人は言わないから、「それはもっと言った方がいいよ」という意味で、「ああ、すごいですね」と。言われた方は絶対気分が良くなりますから、「じゃあもっとこんなふうなのはどうか」という発言が出てくるのです。そういう誘い水というか、応援でやっています。



【赤須治郎】はい、そうですね。「すごい、すごい」。濱さんはいつも本当にすごいのですよね。煽っていくからね。一緒にやると、つついいろいろなこと、余計なことまで言い出しそうになるぐらいに煽るのが濱さんの良いところでもあり、一緒にやるとちょっとつらいなところでもあります。でも個人的に、昨日濱さんからお米とゆずが届きました。ありがとうございます。濱さんのところの田植えの手伝いをしたのです。

【濱 博一】今年は忙しくて農薬をやれなかったので農薬不使用です。農林省の基準では自分

の所が無農薬でも周囲の田畑で農薬を使っている場合、無農薬と言うと怒られます。それで農薬不使用という言い回しが最近増えています。私の米は偶然なのですが農薬不使用です。真面目に取り組んでいる神子原米の高野さんには申し訳ないです。

【赤須治郎】ありがとうございます。あまり横道にそれてはいけません。

回答9「たのんます」

【水野雅男】とにかく僕は自分では専門性を持っていないので、それぞれ得意な人はいろいろな方がいらっしゃるので、すべて「おまえに任すわ」という形でやってもらいます。その方がストレートに任す方がうまくいくと思っています。

【赤須治郎】先ほども「プロデューサー」とかおっしゃっていましたが、水野さんのおっしゃった専門性というのはどんなところなのでしょう？

【水野雅男】つなぐということですかね。人と人をつなぐとか、いろいろな技を持っていらっしゃる方をつなぐ、それが僕の役割だと思います。

【赤須治郎】一つだけ聞かせてほしいのですが、水野さんは今、大学生と一緒にいろいろな活動をされていますが、そういうことをやりたいと思っている方がたくさんいると思うのです。大学生と一緒にやっていく時のコツといいますか、何かアドバイスができるとしたらどういうことがあるのですか。

【水野雅男】やはり彼らがやりたいことをやらせてあげる。設計した方も、それをやらせてあげて、具体的に建物にしていくなとか、そのようにやりたいことはとことんやらせてあげます。最後、その尻はぬぐうわけで、どこかで修正はしますが、そういう形で彼らの自主性を尊重し

ていっているということかなと思います。とにかく研究室ごとをお願いすることは僕は一切やらなくて、個人的に参加したい人に入ってもらうということにしているので、そういうのがよいのではないかなと思いますが、答えになっていますか。

【赤須治郎】なっています。大学生が弱いせりふというのはどんなのですか。これを言うと結構乗ってくるぞ。でも「たのんます」も多分そうなのかな。

【水野雅男】おだてますよ。僕は結構腹立てることもあります。おだてるけれど、それでも、おかしいことはきちんとしっかり怒ることもします。両面ですね。おだてて、怒って。一番大事なのは対等に付き合うということですね。年齢の差はあって、30歳ぐらい違いますが、フランクに話すということがすべてではないですか。それは学生に限らず、いろいろな方と付き合う時も、一緒にやる時も対等にやるということですね。でも、責任を取ることはきちんとやるということですかね。



【赤須治郎】ありがとうございます。ついつい若くて経験のない連中を下に見たような言い方をしてしまいがちですが、そうではなくて対等にということなのだと思います。

【水野雅男】補足です。叱るというのは、人間的におかしいことに対して叱るということですから、やっていることに対して叱るわけではな

いので、補足しておきます。

回答 10「やってみようよ まあ、一緒にやってみましょうか」

【常光利恵】「やりたくないことの言い訳探しばかりやっているな」と。やってみたことはやりたかったこと、やったことが自分をつくる。だから、やってみよう。(会場：笑い)

回答 11「大丈夫、大丈夫」

【南出洋子】私は不安でいっぱい認知症の方の中にいますので、「大丈夫、大丈夫。私たちがいるから大丈夫よ」と。それは認知症の方に言いながら、私自身にも「大丈夫、大丈夫。やれる、やれる」という意味で言っています。

回答 12「やってみましょうよ」

【谷内博史】先ほど「一緒にやらない」という話や、一人でもやる覚悟という話がありました。逆行するようなのですが、何かやろうとする時に、皆さんすごく不安もあるし、その時に「一緒に」と言うかどうかは別にして、「やってみましょうよ」と言うことにしています。「気楽にいきましょうよ」という意味ですが、やってみないことには具体的な答えが出ないという意味で、「やってみましょうよ」と。ただ、私もいつもコーディネーターという役割なので、最終的にプレーヤーとして常にずっと伴走していくことはできない立場だったりします。やりながらだんだんと自力でできるようにしていくところをまず始める。一番最初に背中をぽんと押す。実はやる気満々なのですが、でも不安だったりする時に、「まあ、やってみましょうよ」と言って動き出すところが決めぜりふかな、と思っています。

会場からの質問①



【赤須治郎】この人にこんなことを聞きたいという方がいらっしゃいましたら、どうぞ手を挙げてください。では、指名します。竹の浦夢創塾の柿谷さん、お願いします。

【柿谷昭一郎】竹の浦夢創塾の柿谷と申します。今日は分科会から先生方の非常に良い話を聞きました。私は活動を始めて6年経ちます。先ほど「ローカル」という話がありましたが、我々としてはローカルから脱皮できないとか、もう一つ飛躍できないかということで、今日は商品化についてのお話をお聞きしました。分科会からずっとローカルについてやっていましたが、その点をもう少し、畦地さんにぜひお願いします。

【畦地履正】能登へ来るたびに、おいしい食物と、おいしいお酒を飲むわけです。海のもの、山のもの、非常にいろいろなものがある地域だなと思って、いつも豊かな気持ちで僕は能登から帰るのですが、そのことに気付くことというのがまず一番最初だと思うのです。実は足下にいっぱい良いものがあるのだと。先ほどの分科会でも言いましたが、実は足下にごろんごろんと良いものが落ちているわけですが、それを良いものにとらえられるのか、ただ当たり前のよ

うにあるにとらえるのか。考え方なのですが、当たり前のようにになるとちょっと危ないのですね。逆に、「もう、これすごいやんか」と気づく。先ほど回答で「すごい、すごい」という言葉が出てきましたが、「能登でこんなものが取れるんだ」と気づく。ブリが獲れても、ブリなんか当たり前かもしれませんが、そのように発想を変えれば、田舎の方がすごく豊かなのですよ。ブリとか、うちで言うと天然のウナギとか、都会ではまず食べられないわけですね。食べたとしても、そんなに美味しくないのです。それを現地で食べられる、能登で食べられる、四万十で食べられる。そのように自分の住んでいる町が豊かというように考え出したら、このローカルというのは、何と全国のトップバッターになれるわけです。トップバッターになろうという気持ちがあれば、そちらへ向いていきます。それがビジョンです、方向です。



そのように僕はいつも考えていて、四万十は全国のトップバッターになりたいと、トップバッターになるには自分の足下がしっかりしていたら何とでもなるのだと思っています。そうしたら、いろいろな人に会うのですよ。今日も会いました。お米の話で、「何だ、この人は」という人に会いました。石川県にもすごい人がいるのだと。こんな人たちとネットワークを組めれば、ひょっとしたらお米がフランスへ行くといい話があれば、「うちもちょっとフランスへ行こうや」「フランスへ粟を持っていこうや」とい

う気持ちになれるわけです。四万十の栗だと、うちの栗はこうだという背景を自分たちが語り出したら絶対一番になれるのです、オンリーワンになれるのです。だから、僕たち四万十はいつも勝てると思うのです。負ける勝負はしない。だから、ローカルということを今から非常に自信を持って皆さんには歩いていってもらいたいのですね。地域づくりの始まりはローカルです。都会ではありません。地域から変わって来ることによって、田舎の価値観が変わってきて、絶対トップバッターです。能登はすごく可能性ありますよ。僕なんかうらやましい。うらやましいけれど、ちょっと何かが足りませんね。何でしょう、というところですか。だけれど、僕はお米の話を午前中聞いて、「おお、やっている人もいるやんか」と思いました。またこの人たちと皆さんと、能登と四万十とノウハウのアライアンス、ノウハウを持っている同士がアライアンスすることが、また面白い今後の地域づくりの発展になるかもしれませんね。アライアンスです。

【柿谷昭一郎】ありがとうございました。

【畦地履正】拍手がないので、もう一回拍手を。
(会場：拍手)

会場からの質問ー②

【赤須治郎】では、もうお一人、福田京子さん、お願いします。今日は鳥取からいらっしゃいました。鳥取県地域づくりセンターの福田さんです。

【福田京子】鳥取県から参りました福田と申します。赤須さんとは何年来の付き合いで、今日

もどういう付き合いかということをお聞かせまして、それはこの場では決して言えない付き合いだと申し上げました。それは冗談半分、本気半分なのですけれども。

鳥取県のPRはまた後でぜひしたいと思います。福原さんでしょうか。今、全国各地、観光地や温泉地は大変な課題を抱えている時代だと思います。鳥取県にもたくさんの温泉地があるのですが、きっと同じような課題があると思うのです。福原さんのところにいらっしゃったお客様は、福原さんのところの心からのいろいろなサービスを受けて、お帰りになったり、リピーターにつながったりすると思うのです。ただ、それは和倉温泉にまず行ってみないと分からないと思うのです。そういう和倉温泉に全国から来ていただくための工夫や知恵をぜひお聞かせいただきたいと思います。まず来ていただくためにはどのような工夫をされているか、発信をされているかという点をお願いします。

【福原義明】まずお越しいただくには、やはり地域の情報発信ですね。セールスやマーケティングというのはいろいろな方法があると思いますし、いろいろなチャンネルもあると思いますので、そのチャンネルに合わせたきちんとした情報、観光の素材やおもてなしの素材、我々旅館のハードやおもてなしというのをきちんと作った上で、情報発信するのが大事だと思っています。

それも旅館だけだと弱いので、今日のまさしくテーマである地域の方との連携です。我々は七尾市にありますので、一本杉通りという素晴らしいコンテンツや人、そして我々旅館というのをパッケージで情報発信することによって、例えば和倉温泉や旅館に興味のない方でも、一本杉の魅力や人に会いたいと興味を示されることがあります。それが和倉温泉、七尾でまず成

立しますと、次は輪島や珠洲や能登全体になりますし、もう少し広めると金沢、加賀などオール石川といった広域で連携して情報発信すると力も強くなると思うのです。そういったじわじわとした情報発信の仕方が大事だと思います。当然、情報発信して、いらっしゃったお客様を最終的にはきちんと受け入れるということが大事なので、その辺を連動して進めるのは、繰り返になります。旅館や地域の観光協会だけではなくて、地域の皆様、町の皆様と一緒にやっていくことが大事だと思っています。

【濱 博一】去年(平成 20 年)から「ラグジュアリーマーケット」という、世界の富裕層の方々に日本に来ていただくという国の事業が採択されています。去年、随分一緒に勉強させてもらったのですが、そこで分かったことがあります。彼らは一泊 100 万円でも全然高いと思わないのですよ。僕らからするとケタが違うぐらい収入があるのです。だけれども、世界中の一番を知っているのです。だから世界中の一番を知っている人に「どうぞ来てください」と言う時には、こちら側も本物で一番でないと駄目なのです。言葉は通じなくても、偽物とかごまかしはすぐ見破られますから。福原さんの旅館「多田屋」さんのお話は、僕も泣きそうになりましたが、本物になろうとして、ああいうおもてなしができるように、旅館の体質自体を変えていく努力をものすごくされているわけです。

今、福田さんが言われたように、全国の温泉旅館が今でもよくもっているなと思うぐらい厳しい状況なのですが、もう少ししたらバタバタとドミノ倒しになる時期が来るのではないかとちょっと心配しています。なぜそうなったかというと、旅館業が「工業」になったからです。畦地さんの活動もそうですが、本物はみんな「工芸型」なのです。手づくりなのです。工芸と工業の決定的な違いは、工芸は足し算でしか物が

つくれない、あるいはサービスが提供できないけれども、工業というのは掛け算なのです。儲かるのです。ですから、バスで 1 台に 40 人乗ってきて、40 人×1 人 2 万円だったら、それで 80 万円。それが何台も来たら、掛け算でどんどん売上が上がっていく。そのモデルに入ってしまったら、逆に今度お客さんが入ってこなくなった時、掛け算で負債がたまっていくのです。これはものすごく儲かるけれどもリスクも大きい。世の中が変わってきた時にものすごく怖いビジネスモデルなのです。



旅館観光業が掛け算の工業型ビジネスモデルに変わってしまったところに日本の観光の不幸があるのです。これを工芸型に戻さなければいけないのです。そのキーワードは世界の富裕層なのです。それに世界の富裕層が感動する素材などは日本にはまだいっぱいあるのです。そのことに気がつく、先ほど竹の浦夢創塾の柿谷さんが言われていましたが、「スーパーローカル」が「スーパーグローバル」になれる可能性があることを気がついてほしいのです。そこを信じて徹底的にローカルにこだわることです。ローカルにこだわるということは、この場所に来なかったら絶対に味わえないという、競争の絶対優位性がありますので、だから七尾の一本杉通しもそうです。ここに来なかったら花嫁のれんの話は聞けないし、物が見られない。どこでもやらないということです。それをうっかり間違っただけではありません。あまり批判になるとい

けないのですが、能登大納言をコンビニで売るパンの中に入れて、そういう契約ができて喜んだという話があります。そんな数で勝負するマーケティングをしたら一気にブランド価値が下がりますから、ブランド戦略としては大量の流通ルートに乗せることは、絶対やってはいけません。これからのマーケティングは今までとは正反対の方向を目指すべきです。数で勝負しない。単価で勝負する。その代わり本物を目指す。そちらの方向性でしか、生き残る道はないと僕は確信しています。

2010年2月27日に、また金沢で国際フォーラムを開催し、世界中のラグジュアリービジネスをやっている方々をお招きします。お越しただければ、世界はどうなっているのかというのがすぐ分かるようになります。半分宣伝になりましたが。

【赤須治郎】ありがとうございます。鳥取の福田さんも、ありがとうございます。時間が来ましたので、短くまとめます。地域づくり活動での役割について今日は考えていただきました。後段のお話は、能登には能登の役割があり、金

沢には金沢の役割があり、それは必ずしも同じものではないということです。和倉温泉や四万十での事例は、それぞれの地域が持っている役割、日本の中で果たす役割、あるいは世界の中で果たす役割に着目し、それを発信されているのだと思います。田舎には田舎の価値がある。都会と田舎を比較して、どちらが上とか下とかいうことではなくて、それぞれの地域にある価値観、ローカルカラー、それぞれの役割を大事にしていくということが、私たちがやろうとしている地域づくりではないでしょうか。これで「ひな壇トーク」を終わります。ありがとうございます。(会場：拍手)

【司会進行】進行役の赤須さん、アシスタントの森山さん、ひな壇のゲスト、コーディネーターの皆さん、どうもありがとうございました。今一度、大きな拍手をお願いします(会場：拍手)。これからもさらなるご活躍をご期待申し上げます。それでは「ひな壇トーク」を終わらせていただきます。以上をもちまして、「いしかわ地域づくり円陣2009」を終了します。どうもありがとうございました。

